

2023年フクシマ連帯キャラバンに参加して

全港湾東北地方ひたち支部青年女性部
幹事 藤枝 知博

3/17(金)～19(日)の3日間フクシマ連帯キャラバンへ参加しました。

初日の結団式には全国の全港湾の仲間や他組織が集まり、キャラバン行動の大きさを再認識しました。結団式の中で小名浜支部青年部の矢内部長が団長に任命されました。コロナ禍で縮小していたキャラバンですが、再び全国での動きとなり、団長としての今回の役目の大きさ、また次の団長へのお手本となるようにしっかりと役目を果たしていくと決意が述べられ結団式は終了となりました。

2日目には、津島原告団との意見交換会が行われました。津島には豊かな自然があり、自分たちはその自然と共に育ってきた。しかし、今では田んぼは柳林となり、事故前の面影はどこにもない。政府や東電に対して、原発事故によって荒れ果てた自然を現状回帰にする戦いを続けている。原告団の方々はそうおっしゃっていました。私は原発事故で辛い現実と向き合っている方を知ったつもりでいましたが、被災した方々の帰りたい、そのために元に戻して欲しいという気持ちはそれ以上のもので、私の知らない悲惨な現実がまだまだあることを思い知らされました。豊かな自然を元に戻さなくていいという前例を作ってはいけません。それを許してしまえば同じことが起きたとき同じ苦しみを味わう人がいる。原告団は、自分たちだけではなく、次の世代の人たちのためにもこの戦いを続けています。

その後のフィールドワークでは、夜ノ森～大野駅～双葉町～双葉伝承館～大平山霊園(慰霊碑)～津島地区を視察しました。徐々に避難区域は解除され、立ち入ることができる場所は増えていきましたが、そこに生活は戻っていませんでした。インフラ整備等の問題として、働き手が無く病院やスーパーも開業しないのが現状です。それ故に元の生活ができない場所に人が戻ってくることはない。長引く避難生活で避難先での生活から地元に戻ることもできない。しかし、避難先でのコミュニティでは、後ろ指をさされているような思いを感じながら生活をしている。そんなもどかしい思いを持ちつつ帰還困難区域は解除され保障すらも打ち切られる。避難者の気持ちを考えると胸が痛みました。フィールドワークの最後には、津島原告団のご協力のもとご自宅を拝見させていただきました。建物は野生動物に荒らされ年月とともに朽ち果てていましたが、柱にはしっかりと子供たちの成長が刻まれていました。原発事故から12年経った「今」を見て、原発事故は終わっていないことを強く感じ、もう2度と事故が起きてはいけないと思いました。

原告団の方々と繋がり、今まで入れなかった帰還困難区域の現状を見ることができたのはキャラバン行動だからこそだと思います。それを自分の中だけに留めるのではなく一人でも多くの方に伝え、発信し、一刻も早く原発の無い社会を実現するために行動していきたいと思います。

